

第二章 朝顔姫君の物語 老いてなお旧りせぬ好色心

[第一段 朝顔姫君訪問の道中]

夕つ方(冬の夕方)、*神事なども止まりてさうざうしきに(帝が藤壺入道宮の服喪で新嘗祭も取り止めとなって宮中も沈みがちな頃に)、つれづれと思しあまりて(光君は気張りの無い時間を持ち余しなさって)、五の宮に例の近づき参りたまふ(五の宮の見舞いをいつものように口実にして朝顔君が住まう桃園院にお出かけなさいます)。 *「かんわざ」は<宮廷祭祀>とある。また、注に<十一月の神事が諒闇によって停止。>とある。宮内庁が公表する現在の主要な皇室祭儀の Web ページには、十月の「神嘗祭(かむなめさい、賢所に新穀をお供えになる神恩感謝の祭典。この朝天皇陛下は神嘉殿において伊勢の神宮をご遙拝になる。)」も秋祭り以降の日程に載ってはいるが、やはり「神事」といえば現在でも最重要とされる陰暦十一月の中の卯の日に執り行われる「新嘗祭(にひなめさい、天皇陛下が、神嘉殿において新穀を皇祖はじめ神々にお供えになって、神恩を感謝された後、陛下自らもお召し上がりになる祭典。宮中恒例祭典の中の最も重要なもの。天皇陛下自らご栽培になった新穀もお供えになる。)」のこらしい。当事であれば、日付の明示に等しい記述かもしれない。いずれにせよ、藤壺入道の死で帝は服喪する。それにしても、「藤壺」が<不実母>とは。

雪うち散りて艶なるたそかれ時に(小雪舞い散るしっとりとした日暮れ時に)、なつかしきほどに馴れたる御衣どもを(着慣れた衣服に)、いよいよたきしめたまひて(いっそう香を焚き染めなさって)、心ことに*化粧じ暮らしたまへれば(念入りに身繕いを暗くなるまで為さったので)、*いとど心弱からむ人はいかがと見えたり(光君の艶やかさを見慣れていないで、その美しさに心を動かされやすい桃園院の女房たちはどれほど逆上せ上がるだろうかと思えました)。 *「けさうじくらす」は<化粧をして日が暮れるまで時を過ごす=化粧を暗くなるまでする>。 *「いとど心弱からむ人」とは、第一章第四段冒頭で桃園院の女房たちの様子について語られていたことを踏まえている、のだろう。注には<語り手の実景描写といった感じ。源氏の美しさを讚美。>とある。

さすがに(そのように用意が整いながらに)、まかり申しはた(今から出かけます、ではと)、聞こえたまふ(光君は紫君に申す為さいます)。

「女五の宮の悩ましくしたまふなるを(女五の宮が御加減を悪くして御出でのようで)、訪らひきこえになむ(お見舞いに行ってきます)」

とて、ついみたまへれど(光君は軽く膝をお付きになるが)、見もやりたまはず(紫君は振り向きも為さらず)、若君をもてあそび(姫君をあやして)、紛らはしおはする側目の(不愉快を紛らわせていらっしやる横顔が)、ただならぬを(普通ではないので)、

「あやしく(なぜだか)、御けしきの変はれるべきころかな(ご機嫌が悪くなってしまった留守続きでしたかね)。罪もなしや(悪気は無いんですよ)。*塩焼き衣のあまり目馴れ(私の変わらない粗末な普段着姿を見慣れすぎて新味も無く)、見だてなく思さるるにやとて(見栄えしないと貴方が御思いになるかと思ひ)、*とだえ置くを(気楽に宿直などをしてしまつて共寝が途絶えています)、またいかが(それが気に障りましたか)」 *「しほやきごろも」については、注に<「須磨の海

人の塩焼き衣なれゆけばうとくのみこそなりまさりけれ」(源氏積所引、出典未詳)。>とある。*「途絶え置く」は<共寝が途絶えてしまっている>で、それは光君が「内裏住みしげくな」っていたからだ。

など聞こえたまへば(などと光君が申しなさると)、

「*馴れゆくこそ(私こそ日陰者ですので慣れ親しむほど)、げに、憂きこと多かりけれ(本当に辛い事が多くなります)」 *注に<紫の上の返事。「馴れ行くは憂き世なればや須磨の海人の塩焼き衣間遠なるらむ」(新古今集恋三、一二一〇、女御徽子女王)を踏まえる。>とある。必脚である。「塩焼き衣」を前振りしたのは光君で、「海人の塩焼き衣」が粗末な織目の粗い「間遠(まどほ、隙間のある)」なものであることに掛けて、「目馴れ」を<織目が痛む>と<見慣れる>の洒落言葉にしていた、ようだ。だから、紫君はその洒落言葉を理解して引歌を下敷きにした受け答えをした、という貴族らしい優雅な応対振りを演出した筆運び、なのだろう。また、「徽子女王(きしじょおう)」は齋宮を勤めた後に村上天皇に入内した10世紀中頃の齋宮女御とあり、紫君は前齋院への当て付けも暗意しているかもしれない。引歌のA面は<痛みやすくて困ったものですよ須磨の海人の塩焼き衣は何しろ目が粗いものですから>と軽口めいた親しみ口調で、B面の<親しくなるほど辛くなるんですね須磨の海人の塩焼き衣の目が粗いように貴方との仲も私が日陰者の所為か隙間がちになるようです>という恨み節を愛嬌付ける。歌意は当然B面だ。この歌は沿革も内容も紫君が引くには持って来いの参照歌で、作者はこの引歌を思い付いたからこそ、光君の前フリだったことは先ず間違いあるまい。

とばかりにて(とだけ言って)、うち背きて臥したまへるは(背を向けて項垂れなさる紫君を)、見捨てて出でたまふ道(見捨てて出かけてしまわれることは)、もの憂けれど(心残りだったが)、*宮に御消息聞こえたまひてければ(光君は既に桃園院に本日の訪問の旨を知らせ申しなさっていたので)、出でたまひぬ(お出かけなさいます)。 *注に<訪問の際には、予め消息を遣わしてから出かけたのである。>とある。目上の他家だから、ということなのだろうが、そうすると此処の「宮」は「女五の宮」ということになりそうだ。でも、そうやってしまうと文に色気が出ないので、本来の目的である朝顔君も居ることが明示できる<桃園院>と言い換えた。

「かかりけることもありける世を(こういうことも有り得る仲なのに)、*うらなくて過ぐしけるよ(安心して過ごしてきたなんて)」と思ひ続けて(と紫君は思い続けなさって)、臥したまへり(崩れ伏してしまわれました)。 *「うらなし」は<思惑が無い>ことで、<相手を疑わない>や<安心している>との意になる、と古語辞典にある。

鈍びたる御衣どもなれど(訪問の表向きは喪中見舞いなので、光君は灰色の喪服だったが)、色合ひ重なり(重ね着の色の濃淡が)、好ましくなかなか見えて(上品で意外に美しく見えて)、雪の光にしみじみ艶なる御姿を見出だして(庭先の雪の照り返しに何とも色っぽく映えなさるのを紫君は目に入れて)、「まことに離れまさりたまはば(本当に殿のお心が離れて行っておしまいになったら、どうしよう)」と、忍びあへず思さる(もう懸念を隠し切れずに御思い為さいます)。

御前など(ごぜんなど、先払いや従者たちも)忍びやかなる限りして(ごく少ない親しい者で)、

「内裏より他の歩きは(うちよりほかのありきは、参内以外の外出は)、もの憂きほどになりけりや(億劫になってしまつてね)。桃園宮の心細きさまにてもものしたまふも(でも、桃園の五の

宮様が心細そうに為さっていて)、式部卿宮に年ごろは譲りきこえつるを(式部卿宮に長年お任せ申してきましたが)、今は頼むなど思しのたまふも(今では私を頼りに思い仰るのも)、ことわりに、いとほしければ(尤もなことで、気掛かりですから)」

など(などと光君は)、人びとにもものたまひなせど(その者たちにも言い訳なさるが)、

「いでや(いやあ)。御好き心の古りがたきぞ(女好きがお変わらないのは)、あたら御疵なめる(困った御癖だよなあ)」

「軽々しきことも出で来なむ(まずい事になるんじゃないか)」

など(などと従者たちは)、つぶやきあへり(つぶやき合っていました)。

[第二段 宮邸に到着して門に入る]

*宮には(宮邸にあっては)、北面の人しげき方なる(一条通りに面した人の出入りの多い)御門は(みかどは、北門は)、入りたまはむも軽々しければ(内大臣がお入りになるには軽々しいので)、西なるがことごとしきを(西門が重々しい正門なので)、人入れさせたまひて(供人を通用口から入れさせなさって)、宮の御方に御消息あれば(五の宮のお部屋に光君の御訪問を告げて西門の開門を願いあげると)、「今日しも渡りたまはじ(お知らせはあったが今日は雪なのでお越しになるまい)」と思しけるを(と五の宮はお思いだったので)、驚きて開けさせたまふ(驚き急いで開門させなさいます)。 *注には<桃園式部卿宮邸。北門が通用門、西門が正門となっている。>とある。

御門守(みかどもり、門番が)、寒げなるけはひ(寒そうにして)、*うすすき出で来て(あわてて出てきたが)、*とみにもえ開けやらす(すぐには開けられません)。これより他の男はた(この者の他には一人も)なきなるべし(手が居ないらしい)。ごほごほと引きて(門番はごろごろと門を引き開けて)、「錠のいといたく錆びにければ(金具がだいぶ錆びていて)、開かず(楽には開かない)」と愁ふるを(と嘆くのを)、あはれと聞こし召す(光君は同族の悲哀と感じ入りなさいます)。 *「うすすく」は<慌てふためく。驚きうろたえる。いすすく。>と大辞泉にあるが、今の言葉につながらない掴み難い語だ。「すくむ」や「いそぐ」に近い語感なのだろうか。何の説明も無い。 *「とみにもえ」は注に<零落の邸の光景。「末摘花」巻の常陸宮邸に類似。>とある。雪の日に門が直ぐ開かないのは確かに似ているし、光君が「あはれときこしめす」というのも、王家筋の類似かもしれない。が、桃園院は今上帝から見ても叔父宮の邸であり、その叔父宮は式部卿であり、この夏に亡くなったばかりだ。それに、既に光君はこの院に以前来た事がある訳だし、その時は何処の門から入ったのかは分からないが、権勢を失ってから久しそうな日立宮邸ほどに桃園院が寂れているとは、とても考えられない。作者はそれを承知の上で、常陸宮邸と類似の光景描写をすることで、桃園院の現在の状況というよりは、没落貴族の方向性を表現した、のだろう。

「昨日今日と*思すほどに(式部卿宮が亡くなったのは昨日今日のことと思ひ申しますのに)、三年の彼方にも(みとせのあなたにも、三年も昔のこのように)なりにける*世かな(廃れてしまった有様ですね)。 *「おぼす」は「思ふ」の尊敬語で<御思いになる>とある。となると、主語は五の宮か、朝顔君か、その両者か、はたまた帝か、つまり式部卿の身内である王家筋が彼の死を悼んで「思ふ」から身分制度上の語用として、「思す」という敬語になるのだろう。また、「ほど」は経過時間だから、「おぼすほど」は<王家一族が認識なさっている経過時間>を意味する。そこで此処の文をそのまま言い換えると、<式部卿宮が亡くなったのは昨

日今日のことに王家一族が認識なさっていますのに>となる。が、王族である光君自身の弁としては<王家一族が認識なさっている>という身分制度上の語用を、王族の一人として自らが<思い申す>と謙譲語に言い換えなければ現代語にならない、と私は解す。文法は然て置き、そうでなければ文脈が通じない。 *この「世」は<実際におかれている立場、実情>で、引いて見れば<ありさま>。

かかるを見つつ(こうした現実を見せ付けられても)、かりそめの宿りをえ思ひ捨てず(人は仮染めの宿りに過ぎない俗世にとらわれて)、木草の色にも心に移すよ(季節の変化にまで人生を味わおうとするんだよな)」と、*思し知らるる(光君は自嘲なさいます)。口ずさびに(そして、その思いが口を吐いて、こう一句お詠みなさる)、 *逐語ならく思い知らされなさる>。延いては<つくづくと感じなさる>。だが、自己を客観的に述べている口調なので<自嘲なさる>こそが文意に沿っている、かと思う。いや、確かに意識だが。

「いつのまに蓬がもととむすばほれ、雪降る里と荒れし垣根ぞ」(和歌 20-05)

「いつかヨモギに覆われて、古里に還る宮のみやびや」(意訳 20-05)

*注に<源氏の歌。「降る」と「古」の掛詞。>とある。確かに、技巧としては他に無さそうで、簡素な歌に見える。が、思いの他に思いは深そうだ。ヨモギに足元を覆われて荒んでしまった屋敷の垣根に雪が降り積もる、という寂れた冬の情景詠みに<宮邸も主を失った途端に古里に還る>延いては<宮処も人が居なくなれば直ぐに山野に戻る>という王家ならではの無常観を漂わせている、のだろう。

やや久しう(時間は掛かったが)、ひこしらひ開けて(門がこじ開けられたので)、入りたまふ(光君は邸内にお入りになります)。

[第三段 宮邸で源典侍と出会う]

宮の御方に(東表の五の宮の御部屋で)、例の、御物語聞こえたまふに(例によって他愛も無い御話しを為さる内に)、古事どものそこはかとなきうちはじめ(昔の事を取り留めも無く持ち出して)、聞こえ尽くしたまへど(宮はお話続けなさいましたが)、御耳もおどろかず(光君は繰り言に聞き飽きて)、ねぶたきに(眠たくお成りでしたが)、

宮も欠伸うちしたまひて(宮もあくびをなさって)、「*宵まどひをしはべれば、ものもえ聞こえやらず(歳の所為か宵の内から眠気を催しまして、もうお話しも出来ません)」 *注に<女五の宮の詞。「宵まどひ」は宵のうちから眠くなること。老人の習癖。>とある。

とのたまふほどもなく(と仰る間も無く)、軒とか、聞き知らぬ音すれば(いびきとか、あまり大臣の前でする者も無い音が聞こえて)、よろこびながら立ち出でたまはむとするに(光君が是幸いと立ち去ろうと為さった時に)、またいと古めかしきはぶきうちして(またたいそう年寄りくさい咳払いをして)、参りたる人あり(部屋の御簾前に近づいてくる者があります)。

「かしこけれど(畏れながら)、聞こし召したらむと頼みきこえさするを(御覚え戴いているかとは望み申しますものの)、世にある者とも数まへさせたまはぬになむ(まだ生きているとは御思

いで無いのかもしれませんが)。*院の上は(故院の御父上が)、祖母殿(おばおとど、おばあさん)と笑はせたまひし(とお笑いになった者で御座います)」 *「紅葉賀」巻で桐壺院がその御世に、恐らくは朝餉間(あさがれひのみ、主に朝食用の部屋だが簡単な着替えなどもしたらしい)で着替え中に、北隣の御手水間(おてうずのみ、整髪室)での若き日の光君とその時点で既に老婆の源典侍との色事めいたやり取りを「似つかはしからぬあはひかな(不釣合いな取り合わせだな)」と笑って垣間見ていらした、という記事があった。時に光君は今から13年前の19歳で、源典侍はその時既に57,8歳であり、今なら70か71歳になる。かの場面では、若い日の光君は興味本位で大年増に手を出してしまった、という艶笑譚だった。一般に、ホルモンバランスの過多で年甲斐も無く、または青年、壮年としても旺盛な性欲を持つ余す男女は居るらしいが、それは生命力の一面でも有り、生理的にも文化的にも何を持って異常と判じるかは悩ましそうだ。また、注にはく色好みで名高い老女の源典侍の登場。源氏の古りがたい好色心を対比させていよう。この巻全体の時間の流れ、老い、醜さ、など主題が語られている。源氏の古りがたき恋もまた醜い様相をおびている。>とある。鋭い解説だが、むしろ此处で描かれている好色は、生理的に旺盛な性欲もさりながら、源典侍も王家筋に違いなく、精神的にいつまでも花を追い続ける王家の生き様、のように思えて、それはこの巻の主題というよりは、この物語の主題というべきで、その主題を改めて語る主要な巻がこの「朝顔」巻だというべきかも知れない。

など、名のり出づるにぞ(名乗り出てきたので)、思し出づる(光君はその者を思い出ささいました)。

源典侍(げんのないしのすけ)といひし人は(と言っていたその人は)、尼になりて、この宮の御弟子(みでし、仕え僧)にてなむ(として住み込んで)行なふと聞きしかど(念仏行を唱えていると光君は聞いていたが)、今まであらむとも尋ね知りたまはざりつるを(今まで生きているとも確かめなさらずに居たので)、あさましうなりぬ(驚きなさいました)。

「その世のことは(その当事のことは)、みな昔語りになりゆくを(みな昔話になって行きますので)、はるかに思ひ出づるも心細きに(遠く思い出すのも心細いのですが)、うれしき御声かな(何と懐かしいお声でしょうか)。*親なしに臥せる旅人と(私を親を亡くして悲しんでいる流れ者と思って)、育みたまへかし(庇って下さいな)」 *「親なしに臥せる旅人」は桐壺帝時代の事を知る典侍に対して、私を今や公式には皇籍ではない余所者と哀れんで子供の時のように守って下さい、という楽屋落ちの冗談ではある。しかしこの言い回しに付いては、注に<「しなてるや片岡山に飯に飢ゑ臥せる旅人あはれ親なし」(拾遺集哀傷、一三五〇、聖徳太子)を踏まえる。>とある。ところで、この引歌は聖徳太子が詠んだ歌ではなさそうで、日本書紀にある太子の歌を含む故事を拾遺集(1005年頃、本物語と同時期)で韻文化したものであり、日本書紀が720年に成立したとして、その故事も太子の没後100年を経ているので、本人の歌と伝えられている言葉も故事の内かも知れない。で、その故事の内容だが、聖徳太子が庇った旅人は聖人だった、というものらしく、結局は聖徳太子の偉大さを演出する脚本のようだ。だがしかし、此处では光君が旅人役なのだから、聖徳太子役は典侍ということになる。となると、光君の言う「育みたまへかし」はく貴方は聖徳太子のように節度を守って下さい>を暗意していて、「親なしに臥せる旅人」はく父院亡き今更は私は聖人たるべく節度を守りますから>と断っていることになるワケだ。尤も、70歳過ぎの老人に過つたと釘を刺すという現実味は殆んど無く、是は専ら皮肉ということなのだろうが。

とて、寄りみたまへる御けはひに(御簾近くに寄って座しなされる光君の気配に)、いとど昔思ひ出でつつ(典侍はいっそう昔が偲ばれて)、古りがたくなまめかしきさまにもてなして(昔のよう

な艶かしい気分で応対して)、いたうすげみにたる口つき(齒も衰えてたいそうすぼんだ口元のよ
うに)、思ひやらるる声づかひの(思い遣られる老人口調で)、さすがに*舌つきにて(滑舌も悪い
ものの)、*うちされむとはなほ思へり(戯れかかろうとはなおも思っていました)。 *「したつき」
は<音声がはっきりしないこと>。 *「うち戯る」は<ふざけかかる>。

「*言ひこしほどに(私も同じ事を自分の事として言って来たくらいですから、そのお言葉は良
く分かります)」など聞こえかかる(などと親しげに申し掛けてくる典侍には)、まばゆさよ(閉口
ものです)。 *注に<源典侍の詞。「身を憂しと言ひこしほどに今はまた人の上とも嘆くべきかな」(源氏積所
引、出典未詳)。『集成』は「お互いに年を取りました、それゆえ、お相手としては五分五分、というほどの下意
であろう」と注す。>とある。引歌の字面は<この身を辛いと言って来たくらいだから今は他人の身の上までが
我が事のように痛々しくて同情してしまう>だろうか。ただ、典侍の言う「共感」は光君の言葉を受けての答えなのだ
から<臣籍降下した身の上>や<出家して世俗を離れた聖人としての自覚>の意味かもしれない。そして、その典
侍が言った「共感」を、今度は光君が<老醜の典侍と同じ様に自分も歳をとっているのか>と受け取って、心外でま
ばゆく思った、という文に解釈した。妙に分かり難い文で、不思議なくらい厭に苦勞したので、もしかすると視点
がずれていて、全く見当外れの解釈なのかも知れない。

「今しも来たる老いのやうに(此処に来て急に自分も老いたように、思わされる)」など、ほほ
笑まれたまふものから(光君は苦笑なさるものの)、ひきかへ(考えてみれば)、これもあはれなり
(遠い昔に感慨を覚えます)。

「この盛りに(この典侍が女盛りの頃に)挑みたまひし女御、更衣(父帝の寵愛を競い合いな
さった女御や更衣の内)、あるはひたすら亡くなりたまひ(ある方は既にお亡くなりになり)、ある
はかひなくて(またある方は不遇な身の上となって)、はかなき世にさすらへたまふもあべかめり
(頼りない世間を流離っていらっしゃる人も居る事でしょう)。

入道の宮などの御齡よ(藤壺入道宮の何と短命だったことか)。あさましとのみ思さるる世に
(残念なことばかりのこの世の中で)、年のほど身の残り少なげさに(年廻りから見て余命が少な
さそうで)、心ばへなども、ものはかなく見えし人の(心掛けなども浮世任せに思えるこの典侍の
ような人が)、生きとまりて、のどやかに行なひをもうちして過ぐしけるは(生き残って穏やかに
善行を積んで余生を過ごしているというの)、なほすべて定めなき世なり(結局は人智で定める
事が出来ない宿命というものだ)」

と思すに(とお考えになって)、ものあはれなる御けしきを(感慨に浸りなさる光君の憂い姿を)、
心ときめきに思ひて(情緒に耽ったものと典侍は誤解して)、若やぐ(はしゃぐ)。

「年経れどこの契りこそ忘れね、親の親とか言ひし一言」(和歌 20-06)

「忘れるはずはありません、だって他人じゃないんだし」(意識 20-06)

*注に<源典侍の贈歌。「この契り」に「子の契り」を掛ける。「親の親」は典侍自身をいう。「親の親と思はまし
かばとひてまし我が子の子にはあらぬなるべし」(拾遺集雑下、五四五、源重之の母)を踏まえる。>とある。こ
の引歌には「源重之が母の近江の国府(こふ)に侍りけるに孫(うまご)の吾妻よりよるのぼりて急ぐ事侍りてえ此度

逢はで上りぬることと言ひて侍りければ祖母(おば)の女のよみ侍りける」という詞書がある。だから字面はく祖母を思えば訪ねて来るだろうに、会いに来ない様な子は孫じゃない>で、いくら急用だからと言って吾妻から京へ上るのに途中の近江に寄らないとは情けない、という恨み節だが、歌意はく可愛い孫に会いたい>という親心。つまり典侍は、すっかり光君の身内気取りでいるらしく、その親しみは無駄に重い。

と聞こゆれば(と典侍が贈歌申すのも)、疎ましくて(光君は疎ましく)、

「身を変へて後も待ち見よ、この世にて親を忘るるためしありやと (和歌 20-07)

「もしも会えなくなったら、親子の縁は変わらない (意識 20-07)

*注にく源氏の返歌。「この契り」を「身を変へて」の来世の意と「この世にて」と切り返す。「この世」と「子の世」の掛詞。>とある。「あの世で待っていて呉れ」は強烈な突っ放しだ。一応、「私の誠意を見届けてくれ」とやさ言葉を繕っているが、あの世でこの世の誠意を眺めても、それこそ身内じゃないんだから、何の意味も無い。つまり、縁が無い。だと言うのに、光君はいけしゃあしゃあと「頼もしき契り」と続ける。尤も典侍には、それでも絶望しない図太さがあるが。両者共天晴也。

頼もしき契りぞや(私と祖母上とは頼もしいご縁ですよ)。今のどかにぞ(いずれゆっくり)、聞こえさすべき(お話ししましょう)」

とて(と言って)、立ちたまひぬ(出て行ってしまわれました)。

[第四段 朝顔姫君と和歌を詠み交わす]

西面には御格子参りたれど(西表では夜になって格子窓を閉めてあったが)、厭ひきこえ顔ならむもいかがとて(迷惑顔をし申すようになってもいいけないと)、一間、二間は下ろさず(一間二間は下ろさずにありました)。月さし出でて、薄らかに積もれる雪の光りあひて、なかなかいとおもしろき夜のさまなり。

「ありつる老いらくの心げさうも(ああした典侍のような老いてからの若やぎは)、良からぬものの(好ましくないものとして)*世のたとひとか聞きし(世間の誰もが例に挙げるものだとか良く聞いたものだな)」と思し出でられて(と光君は思い出しなさって)、をかしくなむ(可笑しくなりました)。 *「世の譬ひ」について、注はく『河海抄』所引「枕草子」に「清少納言枕草子、すさまじきもの、おうなのけさう、しはすの月夜云々」。現存本にはない。『二中歴』十列に「冷物、十二月月夜--老女仮借--」とある。>とある。どうも、翁より媪に冷たく、同じ老人でも男の色気は大目に見られるが、女の色気は嫌われるらしい。子から見た母への期待だろうか。

今宵は(それが漫然と日を送ってはいられないと光君に思わせたのか、今宵は)、いとまめやかに聞こえたまひて(実に真剣に朝顔君にお話し申しなさって)、

「一言(せめて一言)、憎しなども(厭だとでも)、人伝てならでのたまはせむを(人伝でなしに直接仰っていただければ)、思ひ絶ゆるふしにもせむ(それを諦める契機にも致しましょう)」

と、おり立ちて責めきこえたまへど(折り入って迫り申しなさったが)、

「昔、われも人も若やかに(自分も相手も若々しくて)、罪許されたりし世にだに(過ちが許されていた頃でさえ)、故宮などの心寄せ思したりしを(亡き父宮などが好感を持って御出でだった人に)、なほあるまじく恥づかしと思ひきこえてやみにしを(それでもむやみに恥づかしく思い申して思い止まったものを)、世の末に(この晩年になって)、*さだ過ぎ(時を逸したのに)、つきなきほどにて(分別が無さそうで)、一声も(ただの一声も直にお答えするのは)いとまばゆからむ(あまりに決まりが悪すぎます)」 *「さだ」は<時>。

と思して(と御思いになって)、さらに動きなき御心なれば(とても変わりそうも無い朝顔君のお気持ちなので)、「あさまじう(なさけない)、つらし(悲しい)」と思ひきこえたまふ(と光君は思い申しなさいます)。

さすがに(そうかといって)、はしたなくさし放ちてなどはあらぬ(乱暴に言い捨てたりなどすることも無い)人伝ての御返りなどぞ(女房取次ぎでの御返事といったものが、却って)、心やましきや(じれったい)。夜もいたう更けゆくに(夜もいっそう深まるうちに)、風のけはひ、はげしくて(風の音が激しく吹いて)、まことにいとも心細くおぼゆれば(本当に何と頼りない人生かと思われて来て)、さまよきほど(目立たぬように袖口で)、おし拭ひたまひて(涙を押し拭いなさって)、

「つれなさを昔に懲りぬ心こそ、人のつらきに添へてつらけれ (和歌 20-08)

「昔と同じつれなさを、懐かしむ身の情けなさ (意識 20-08)

*注に<源氏の歌。「つれなさ」「つらきにそへて」「つらけれ」同語同音を反復した執拗な恋情を訴えた歌。>とある。確かに執拗にも思うが、それにしても深刻さが無くて、むしろ軽ささえ感じる調子の良さで、まるで宴席の歌のように聞こえるのは、多分、肌を重ねずに来た風流な遊び事に留まっているからなのだろう。

心づからの(自ずとそう思います)」

とのたまひ*すさぶるを(と光君が言い紛らしなさると)、 *「すさぶ」は<もてあそぶ、慰み半分にする、興じる>とあり、その意味では「自嘲している」とも取れるが、それでは次の文にあるような女房の唱和が不謹慎に成ってしまう。で、<慰み半分にする>ということを「気を紛らす」と言い換えた。

「げに(ご尤もな仰せで御座います)」

「かたはらいたし(気が引けます)」

と(などと言って)、人びと(女房たちが)、例の(例によって、御返歌を為さるようにと)、聞こゆ(朝顔君に薦め申します)。

「あらためて何かは見えむ、人のうへにかかりと聞きし心変はりを (和歌 20-09)

「今さら何も変わりません、神に捧げた身ですから (和歌 20-09)

*注に「朝顔の姫君の返歌。「人のつらきに」を受けて「人の上にかかりと聞きし」と切り返す。」とある。「人の上にかかりと聞きし」は「人間には良くある事と聞いている」であり、そういう「心変わり(心変わりといったものを)」「あらためて何かは見えむ(今さら如何しようとは思わない)」という、神職を奉じた前齋院としての立場を前面に押し出して、いわば精一杯抵抗している歌。健気とでも言うべきか。

*昔に変わることは(退下したとはいえ還俗することは)、ならば(許されません) *この文の字面は「昔と違う事はした事がない」で、確かにそういう言い方をしているのだろうが、歌意を受けて読めば「昔に戻っていいとは習っていない」を意図しているに違いない。

など聞こえたまへり(などと朝顔君は御答えになりました)。

[第五段 朝顔姫君、源氏の求愛を拒む]

いふかひなくて(結局実らないまま)、いとまめやかに怨じきこえて出でたまふも(それでも誠実に残念でならないと言ひ残されてお帰りになるものの)、いと若々しき心地したまへば(光君はとて若やいだ気分であらして)、

「いとかく、世の例になりぬべきありさま、漏らしたまふなよ(私のこんな見つとも無い所を人に言い触らしなさいますなよ)。ゆめゆめ(きっとですよ)。*いさら川なども(いさら川などの古歌を持ち出して、私とあの人との仲を、さあ分かりませんと誰かに惚けて答える事さえ)なれなれしや(不謹慎だと心得なさいよ)」 *「いさらがは」は注に「犬上の鳥籠の山なるいさら川いさと答えて我が名漏らすな」(古今六帖、名を惜しむ)。『完訳』は「情交もないのに、あったかのように、この歌を持ち出すのが、「馴れ馴れし」と注す。」とある。現在の滋賀県犬上郡は多賀大社辺りの地名らしく、豊郷駅前には犬上神社も祭られているが、律令制で定められた地域では彦根市を含む東山道淡海湖東部を広く言ったようだ。で、彦根市正法寺町大堀山登山口にある万葉歌碑に「犬上の鳥籠の山なる不知也川(いぬかみのとこのやまなるいさやは)不知とを聞こせわが名告らすな(いさとをきこせわがなのらすな)」(巻11-2710)が在る事が、多くの紀行サイトに写真入で楽しく紹介されている。以下、この万葉歌の方を参照する。言われてみればトリカゴのざるを伏せたように見えなくも無いお椀形の丘みたいな大堀山が鳥籠山(とこのやま)で、麓を流れる芹川の支流が本当に小川(いさら川)の不知也川(いさやは)だと言う説が有力だと、その説明通りの写真が掲載されている Web サイトには、なるほど納得してしまう。その場所が1200~1300年前から同じ光景とは信じられないが、自然の景観は意外と残るものは残っているのかもしれない。だがしかし、この歌は特に犬上一族にまつわる故事を背景に持つものでもなく、不知也川ならでの情景でもなく、「いさや川」ならでの「いさ(いやさて良く分かりません)」を音で導くための枕が前節の全てらしい。とはいえ、犬上郡に縁の有る者や土地勘の有る者が多く居たであろう宮処人の間でこそ、その洒落心が喜ばれたことは確かだ。つまり歌意は、後節の「いさとを聞こせわが名告らすな(さあ知りませんと申して私の名を言うな)」で、恐らくは世間に名前が出るのを憚られる詠み手が浮気相手に口止めをするような、宴席での戯れ歌めいた調子だ。そして、この歌をわざわざ引き合いに出して、女房をたしなめる体を光君は見せるが、引歌の軽さと言ひ、それに掛けた洒落言葉の使い回しと言ひ、光君のはしゃぎぶりは十分に描写されている。

とて(どのように)、せちにうちささめき語らひたまへど(しきりに女房の宣旨にひそひそ話していらしたが)、何ごとにかあらむ(傍目には何事かと思われます)。人びとも(他の女房たちも)、

「あな、かたじけな。あながちに(主様はずい分かつたくなに)情けおくれても(気後れて、まあ)、もてなしきこえたまふらむ(他人行儀に光君のお相手なさるんですねえ)」

「軽らかに(若い者のように軽率に)おし立ちてなどは(無理やり事に及ぼうなどとは)見えたまはぬ御けしきを(なさらないだろうとお見受け申し上げる光君の落ち着いた御様子なのに)。心苦しう(気が引けます)」

と言ふ。

げに(実は主様も)、人のほどの(あの方の素晴らしさの)、をかしきにも(見映えも)、あはれにも(内面も)、思し知らぬにはあらねど(お気付きにならない筈は無いが)、

「もの思ひ知るさまに見えたてまつるとて(それに気付いて心を寄せるように光君に御会い申しても)、おしなべての世の人のめできこゆらむ列にや思ひなされむ(多くの人が称え申すのと同列の世間並みの女に成るに過ぎないと御思いになったのでしょうか)。かつは(それに)、軽々しき心のほども(恋に浮かれる乙女心も)見知りたまひぬべく(見透かしなさるに違いない)、恥づかしげなめる御ありさまをと思せば(気後れするほど優れた御姿と光君を御思いになれば)、なつかしからむ情けも(親しげな好意も)、いとあいなし(とても示せるものではない)。

よその御返りなどは(型通りの季節柄のご挨拶のお返事などは)、うち絶えて(避けたりはせず)に、おぼつかなかるまじきほどに聞こえたまひ(近況が分からなく成らないほどにはお便り申し上げなさって)、人伝ての御応へ(御会いする時は女房を介しての御応えで)、はしたなからで過ぐしてむ(失礼の無いように心がけてきたようです)。

年ごろ(もう何年も)、*沈みつる罪失ふばかり(心を向けずに来た罪滅ぼしの)御行なひをとほし思立てど(御念仏行を勤めようとは思ひ立ちなさるものの)、にはかにかかる御ことをしも(急に出家を準備して)、もて離れ顔にあらむも(光君を避けたようになるのも)、なかなか今めかしきやうに見え聞こえて(却って当て付けのように成ってしまって)、人のとりなさじやはと(人が噂しはしないかと)、世の人の口さがなさを思し知りにしかば(世間の口さがなさを知っていらっしやったので)、かつ(同時に)、さぶらふ人にもうちとけたまはず(側仕えする女房にも打ち明けなさらず)、いたう御心づかひしたまひつつ(いっそう御用心なさりながら)、やうやう御行なひをのみしたまふ(次第に御勤行一筋の生活を為さいます)。 *「沈む」は普通<落ち込む>だろうが、語義は<平面下に下降して見えなくなる>ことと思われ、広義で<見ない、意識しない>と考え、さらに<省みない>を<心を向けない>という他動詞表現にして逃げた。それに「罪」についても、「沈みつる罪」なのか「罪失ふ」なのかも良く分からない難所だ。

御兄弟の君達(おんはらからのきんだち)あまたものしたまへど(多くいらっしやいましたが)、ひとつ御腹ならねば(母親が違う他家育ちなので)、いとうとうとしく(全く疎遠で)、*宮のうちいとかすかになり行くまに(宮邸が寂れて行く一方の時に)、さばかりめでたき人の(このように立派な方が)、ねむごろに御心を尽くしきこえたまへば(熱心に御心をお寄せ申し下さるのを)、皆人(女房初め使用人一同が)、心を寄せきこゆるも(援助を期待申し上げることに)、ひとつ心と

見ゆ(相違は無いと存じます)。 *注に<故桃園式部卿宮邸の荒廃、その女主人への源氏の求愛、取り巻きの女房の心理。故常陸宮邸の末摘花の物語に類似。>とある。